

---

# 彼岸花

紫野蒼紅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼岸花

### 【コード】

N9449Y

### 【作者名】

紫野蒼紅

### 【あらすじ】

彼岸花について思うことをかいたSS。たんぶらーに乗せたものとほぼいっしょです。

それは確か私が小学校の頃だった気がする。

灰色の雲が無機質で諦めたような灰色の煙突から噴出している。その下には馬鹿みたいに着飾るくせに不吉さを覚えさせる車がエンジン音を立てて嘶いて、周りを取り囲むようにすすり泣く人々の群れがあった。

秋もやってきて寒さを感じるこの日、今日も誰かが死んだ。正確には顔も知らない、私の親戚だけれども。

群れにおぼれそうになる私は場違いなほど赤い髪を押さえながら、車から運び出される白い棺を見ていた。あの中に人の死体が入っているのかと、私はどこか現実味のなさを感じざるおえなかった。

休日を満たしていたのに、急に青い顔をした父親に実家に行くよと言われて、わけも分からぬまま黒い服を着せられて車に乗せられ。車酔いに耐えて漸くついた実家で待っていたのは、見知らぬ人が顔に布をかけられて寝ている姿。

ドラマで見たことがある光景に一瞬眩暈がした。でも腐敗臭とやらはしない、そりゃそうだと父親はいう。なんでもつい昨日ぼっくり逝ったばかりだそうだ。

そうこうしているうちに人にかげられた布がとられ、皆にアルコールを含ませた布が渡される。よく分からなかったがこれで死者の体を拭くらしい。私も母親に習ってその人の頬を拭くと、確かに柔らかいのに、明らかに生き物ではない何かを感じる。拭いた手から感触がいつまでもいつまでも抜けず、今でもはつきりと思い出せる。

そこからいろいろとあつたがよく記憶にない。死体に触れた感触があまりにもはつきりと残っていて周りのことが頭にはいらなかった。この気持ちは、いったいなんなのだろうか？

親に連れられて見たことのある葬式会場に入る。ゼブラの縦じまがより現実味を薄くして、さほど広くない空間が体育館ほどにも思えて。

ずっと縦じま（母親曰く鯨幕というらしい）を見ていたらお坊さんがきて、皆馬鹿みたいに静かに座りはじめた。歌のようなアラームのようなお経が眠気を誘う。いつになったら終わるのか、あんまりにも暇だから配られたお経の台本のようなものを適当に眺めながらあくびを噛み殺していた。

隣のおばさんが嗚咽をこらえていたのが、やけに印象的だった。

気がつけばお経の時間が終わって、焼香をする番になっていた。皆灰をつまんで妙な動作をする、シユールというものはきつとこういうことを言うのだなと思う。だってあんまりにも動きが同じものだから、面白くて。

自分も真似して、お辞儀して灰をつまむ。焼け焦げたともいえない、妙に乾いた石灰に似た匂いが鼻をつく。花に包まれた祭壇の上で幸せそうに微笑む遺影が、ちくちくと胸をさす。だから間違えていたことに暫くは気がついていなかったのは、ここだけの話だ。

人がよさそうな笑顔と嗚咽をこらえていたおばさん、なるほどその人はずいぶんとよい人だったんだな、だから皆悲しそうなんだな。そう考えた瞬間、目の前にぽんと置かれた棺と手の感触が急に現実味を帯びてきて、吐き気がした。

吐き気も収まってきたころ、周りでは死者へのメッセージを読み上げながら、皆で棺の中に死者への手向けを入れていく。父親から何故か絵本を手渡されて、これを一緒に入れてくれと頼まれた。大事にとっておかれたらしいその絵本は、父親が子供の頃その人に返しそびれた本だという。確かこの本、私が小さい頃いっぱい読んだ本だった気がする。

それを花でいっぱいになった棺にそつとおく。心の中で「絵本あ

りがとう、面白かったよ」と呟きながら。

「白く分厚い鉄の壁が目の前にある。

普段は硬く閉ざされた壁は、今は開かれている。いよいよ棺は燃やされるのだ、沢山の人々の慈しみに見送られながら。棺の周りでたくさん人が泣いている。先ほどのおばさんは棺に擦り寄って泣いている。よき人だったらしいその人は、皆に思われながら鉄の扉の向こうへと行ってしまった。

秋もやってきて寒さを感じる時、彼岸花の咲く頃。私は見知らぬその人の葬式と、触れた感触を思い出す。

今日も私の髪と同じ彼岸花が揺れる。

(後書き)

初めて投稿するのでまずは短いもの、と思いき最近かいた彼岸花をお題にしたものを。

実は半分ぐらいは実体験ですが、まあそれはそれでということ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9449y/>

---

彼岸花

2011年11月28日06時04分発行